

運営・学習・交流からみた小中一貫校の評価に関する研究

建築計画分野

吉川 敬子

近年、多くの自治体で小中一貫校の取り組みが見られるなか、小中一貫校の教育方法の独自性や学校活動の多様化や弾力性について、また施設計画との関係について解明する研究はない。本研究は運営・学習・交流を視点に、小中一貫校を有意性を明らかにし今後の方向性を見出すことを目的としている。

小中一貫校が学習環境の質の向上、児童・生徒の生活環境の充実に寄与し、児童・生徒の可能性を拡げている有意性がある中で、よりよい一貫校にむけて、小学校、中学校が日常的に密な連携がとれる施設一体型は有効である。また小中一貫校で児童・生徒の交流の意義が見られる中で、児童・生徒の行動領域を重ねる運営計画と配置計画、また動線の機能だけに終わらない、広さがあり滞留性のある廊下という空間的要素と、「モノ」と「ヒト」の契機が合わさることで多様な交流に発展すると考えられる。

1. 研究の背景及び目的

日本の教育制度は何年もの間、小学校・中学校・高等学校といった定められた学年、年齢でまとめられた学校の運営が行なわれてきた。しかし現在の教育方法は、教育の個別化、児童・生徒の個性化など時代の流れと共に徐々に変化しつつある。小学校では学級担任制であるのに対して、中学校に入ると教科担任制へ移行し、教師と子供の関係が変わる。そういった現状に対し、小学校と中学校の相互理解・相互交流が十分に行なわれていないとしないのが現状である。

そんな中新たな動きとして近年、公立学校における小中連携・一貫校がいくつか設計されている。少子化に伴う学校の統廃合の問題と併せて、学校文化の違いやギャップを小中連携・一貫の議論によって解消するとともに、改めて義務教育課程における教育手法を捉え直せる可能性がある。

本研究では、小中一貫制度を行なっている自治体で、最も多く採用されている4・3・2システムのカリキュラム(図1)で、運営の実施をしている学校を対象に以下3点に焦点をあてる。

第一に小中一貫校の運営の特性を明らかにし、小中一貫校の有意性を提示する。第二に、小中一貫校の学習活動で最も特徴的な、5学年、6学年の授業内容を明らかにし、学習面、教師の活動の視点で成果と課題を探る。第三に、小中一貫校の異学年交流の実態を把握し、その意義と学校空間との関連を明らかにする。これらを踏まえた上で、小中一貫校を評価し、小中一貫校の今後の方向性を見出すことを目的としている。

2. 調査概要

対象事例となるうる抽出した小中一貫校を分類すると、新設されて小中一貫校となった(i)校舎一体型、一つの敷地に小中学校で隣接配置していた既存校舎を利用し、教室配置を変え小中一貫校とした(ii)校舎隣接型、小学校と中学校が分離して配置されカリキュラム面で小中一貫をおこなう(iii)校舎分離型の3タイプに分類でき、各タイプ1校ずつ合計3校を選出した(図1)

研究方法は第一に学校運営に関して3校の学校関係者にヒアリング調査行なった。第二に5,6年生の学習活動に関して、施設が一体で小中一貫校を展開しているTo、Taの2校において授業観察調査と授業を担当する教師にヒアリング調査行なった。第三に児童・生徒の交流に関しては②と同じくTo、Taの施設が一体の2校にて行動観察調査を行なった。

表1. 調査対象校の概要

学校名	To: とどろみの森学園	Ta: 田原小中学校	Sa: さつき野小学校・中学校
開校年	平成20年	平成17年	平成17年
現在の校舎	新設	既存小中を改修	既存小中を利用
所在地	大阪府箕面市	奈良県奈良市	大阪府堺市
建築形態	(i) 校舎一体型	(ii) 校舎隣接型	(iii) 校舎分離型
学級児童数	1学年1クラス 132人	1学年1クラス 81人	14クラス 369人
教科担任制の移行時期	5年から一部教科担任制(算・理・社・図・家・音)	5年から一部教科担任制(家・音・英)	5年から一部教科担任制(体・英)

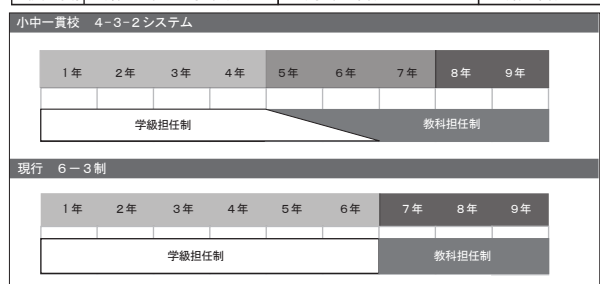


図1. 4・3・2システム

3. 小中一貫校の運営の特性

1) カリキュラムの特徴

3校において従来の6-3型を変更し、9年を4-3-2(低学年-中学年-高学年)という3つの学年区分をつくり、段階的な教育を行なっている。

2) 時程編成の特徴(図2)

Saのような校舎分離型では、小学校・中学校で授業開始時間を合わせるなどの考慮がされていない。一方で施設が一体化されているTo、Taでは全学年で授業の1時間単位を統一する、または授業開始時間をあわせる工夫を行なうことで異学年及び教師間の交流と学習活動など、小中の連携の機会を増やし学校運営の一貫性が保たれるものと考えられる。

3) 小学校-中学校間の運営の特徴(表2)

3校において小学校・中学校間で頻度に差はみられるものの定期的に職員会議や教科部会など意見の交換の場を設けている。それに加えて施設が一体で小学校と中学校で職員室を共有しているTo、Taは些細な情報でも日常的に情報交換をする機会をもち<1>、またToでは中学3年生の進路指導の問題を小学校教師も含んで話し合い、生徒の将来の見通しを意識させるような取り組みをしている<2>。

4) 学校活動の特徴(表2)

施設が一体となってるTo、Taは、そうじや給食などの企画された異学年交流を日常的におこない、また委員会やクラブでは5年生から9年生ま合同で行なうことで5年から中学生への移行をスムーズにさせようとしている。また入学式や卒業式も合同に行い児童・生徒の日常的な交流を誘発させたり、交流から児童・生徒の精神面の育成を期待するなど、児童・生徒の関わりによって学校生活を豊潤化させようとしている。(表2)

一方、校舎分離型のSaは日常的な交流は難しいことがわかる。

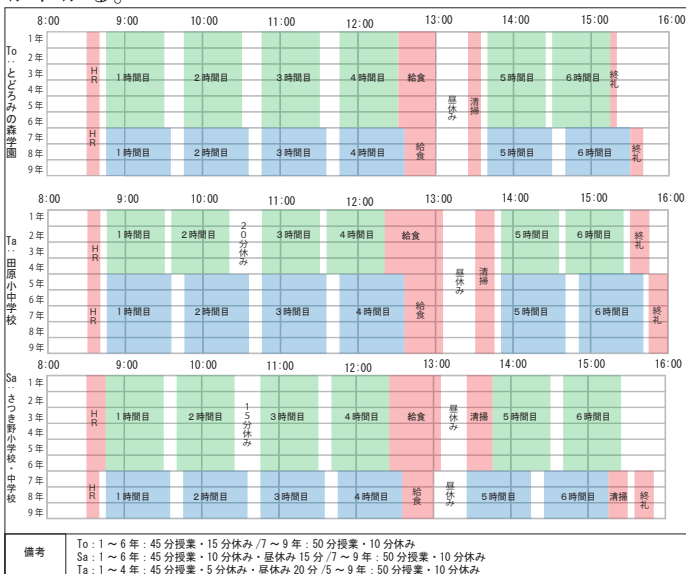


図1. 小中一貫校の時程編成の特徴

このように施設が一体となって小中一貫校を行なう校舎一体型、校舎隣接型の2校と校舎分離型に連携の密度の違いがでてくるのがわかった。一貫性をもった運営を行なうために、日常的に教師間のやりとりができる施設が一体となった校舎は有効である。

4. 小中一貫校の学習の特性

小中一貫校の教育の一つである4-3-2システムでは、低学年(1~4年)は学級担任制、中学年(5~7年)から教科担任制を段階的に導入し7年からは完全教科担任制となる。5、6年生の授業は従来の学級担任制の授業とは違い、特徴的な学習形態が展開されている。ここでは施設が一体で密に連携が行なわれているTo、Taの2校において5、6年生の学習特性をみる。

1) To: 教科担任制の学習の特性(表4)

Toでは各教科ごとに担当教師が入れ替えて大幅に教科担任制で授業を展開しているところに特徴がある。担任教師は国語と得意とする科目を担当し、その教科に対して5年と6年の間で交換授業を行なっている。

■担任教師の余裕時間

担任は授業時間の軽減により余裕時間ができる。その時間を活かして自ら担当とする教科の教材研究や資料集め、授業の見通しを丹念に行なうことができ、授業の質を高めることにつながっている<1, 2>。

■教科部会による連携

小学校中学校間の教科部会や授業見学によって、小学校-中学校間での意見交換を行なっている。中学校で学ぶことや生徒がつまづくポイントを把握でき、担当する教科における自分の役割の再確認していることがわかる<3, 4>。児童の学習面への大いなる配慮ができ、中学校へ向けて先を見越した授業を展開できることがわかる。

■課題

教科ごとに担当教師が変わることで、問題が起きた際授業時程を弾力的に扱うことができないことや教師

表2. 運営概要

学校名	To: とどろみの森学園	Ta: 田原小中学校	Sa: さつき野小学校・中学校
学校長ポスト	校長1人教頭3人	校長1人教頭2人	校長2人教頭2人
職員会議	1回/1ヶ月	1回/1ヶ月	1回/2ヶ月
部活動	7年~	5年~	7年~
委員会活動	5年~	5年~	7年~
合同行事	入学式、始業式、運動会、卒業式、文化行事	入学式、始業式、運動会、卒業式、文化行事	運動会、文化行事
そうじ	全学年たてわり掃除	学年ごと	学年ごと
異学年給食	5~9年 毎日	学年区分ごと 週1回	なし

表3. 小中一貫校の運営の特性

【小学校中学校間の運営の特性】

<1>うちの中学校は中3の先生が中心で、他の学年の先生が何人か、小学校の先生も中学校の進路指導の会議に入ってもらいます。分からないなりに入ってもらって聞いてもらいます。9年間で教えるのに、9年の出口を知らないのに1,2年で何を教えられるんっていう考え方で。(To・教頭)

<2>小学校だけの問題や出来事があっても、職員室で帰宅までのちょっとした時間に小学校と中学校の先生が話して、その積み重ねで近況報告みたいに互いにしてて、こんなことあったんやなって昔はこんな頑張ってたらしいねと子供たちに話しながら見守っていく。(Ta・教頭)

表4. To: 5, 6年の教科における担当教師

	算数	国語	理科	社会	図工	音楽	体育
5年	算数専科	5年担任	5年担任	6年担任	中学技術教師	音楽専科	5年担任+ 中学体育教師
6年	算数専科	6年担任	5年担任	6年担任	中学技術教師	音楽専科	6年担任+ 中学体育教師

と児童の間の安定感がなく、生活面や学習面で指導や注意に対して生徒の定着度が低くなることがあげられる。

2) Ta : TT¹⁾ 形式による学習の特性(表5)

Taでは、5, 6年生の算数、理科を中心として小学校と中学校の教師によるTT形式の授業に取り組んでいるところに特徴がある。

■TTの役割分担(図2)

TTで授業をしていく上で、スムーズに小中教師が連携していくため、3つの指導形態をあらかじめ開発し、授業で展開している。

■習熟度別の対応(図3)

共通課題に取り組む際、小学校の担任教師は進度が遅れてる児童を重点的にみる、中学校の教師は進度が進んでいる子に発展的な問題を出すなど、進度にかかわらず児童に満足がいくように調整していることがわかった<8>。

■基本の充実から発展まで

TTを行なうことで、小学校の基礎基本の分野を二人の教師で定着させること、その上に中学校教師により中学校への移行の見通して発展的な内容を教えること加わり、授業としての完成度が高まることがわかる<9>。

また児童への学習効果だけでなく、教師間も学習方法を学びあうなど利点は多い。

表5. Ta : 5, 6年の教科における担当教師

	算数	国語	理科	社会	図工	音楽	体育
5年	5年担任+ 中学数学教師	5年担任	5年担任	5年担任	5年担任	中学音楽教師	5年担任
6年	6年担任+ 中学数学教師	6年担任	6年担任+ 中学理科教師	6年担任	6年担任	中学音楽教師	6年担任

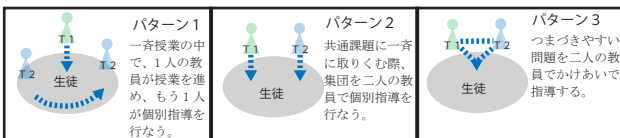


図2. TTのパターン

表5. 小中一貫校の学習の特性

【教科担任制の学習の特性】
■担任教師の余裕時間 <1>先生はあいている時間で教材研究できるし、専門性がかなり出せるのかなと、だからあいている時間に実験の器具の用意をしたりね、交換しているその教科の、専門性というのかこれを1年間担当することで時間のゆとりは出来ますよね (5年担任・理科担当・To) <2>もち授業が少ない分、一人ひとりの学習の進み具合をちゃんと把握する時間があります。(6年担任・社会担当・To)
■教科部会による連携 <3>教科によって研究部会があるんですよ。中学校で困った児童がいたときに、中学校はいる前にどうということが身についていると、中学校は行った際に困難が出てきた際に、小学校のときにこういうことを徹底してすべき必要があるんだとか、小中のつながりの中で何をしとけばいいというのを話したりですね。(5年担任・理科担当・To) <4>教科部会ってというのがあって、それぞれの部会で、小学校の授業を中学校の先生が見にきたりだとか、そういうのはしてますね。小学校でもっと基礎的なことを身につかせないといけないと改めておもしろし、見通しをつけやすくなったと思います。(6年担任・社会担当・To)
■課題 <5>トラブルがあったときに、授業時間削ってでも話し合いたいときがあるんですね。とことんまで話し合いたいときはあるんですよ。そういうのがしにくいのはありますね(6年担任・社会担当・To) <5>授業においても話し合いの問題が起こったときに、自分の都合で時間割を入れ替えることができない。(5年担任・理科担当・To) <7>指導したり注意したりしたことを、授業を変えるとすぐ離れるじゃないですか。(算数専科教師・To)

■課題

中学校教師の算数と理科の授業の毎回の授業参加により、中学校教師の量的な負担がみられるという課題がみられた。質の高い教育が展開されているなか、中学校教師の毎回の授業参加が必要か否か、考えていく必要もある<10>。

また二人体制で児童に対応することにより、児童に過保護な対応になりすぎるといった問題点もある。児童自らの力で考えさせるように促すなど、見守る対応を取り入れていくことも必要であることがわかった<11>。

3) 教科担任制の導入による集団の教師による指導

小中一貫校の教科担任制による集団による指導によって、児童に対する一面的に終わるのではなく多面的な評価ができることや、また児童にとって自らをわかしてもらい機会を多くもてることで、個々の能力や得意分野をのばせ、児童の可能性を膨らませることができると評価できる<12, 13>。

5. 小中一貫校の交流の特性

ここでは施設が一体となっているTo, Taの2校において一日の休み時間内に異学年交流の発生する条件を整理する。

表7. 小中一貫校の学習の特性

【TTの学習の特性】
■習熟度別の対応 <8>出来る子は出来る子なりの中学の先生の応用問題があるんですけど、出来た子には早く出来た子問題が出来るし、その間しんどい子には担任がゆっくりその間教えられるし、それはすごく魅力的ですよ。(5年担任・Ta)
■基本の充実から発展まで <9>中学校になればこういう発展的な問題もあるよという、中学校を見越して授業をやってくれたり。また二人で基礎も押さえて授業でやってくれはるから、いい授業になっていると思う。(6年担任・Ta)
■課題 <10>TTに入ってくれて、5年から9年まで全てを把握するわけだし、時間的に中学校の先生が負担かかってくると思う。(6年担任・Ta) <11>ただ、二人で教えることで、5, 6年の子供たちはすぐに、先生と質問してくるんですね。それに対してすぐつづけることができるでしょ。それはあまりはよくないと思います。(中学数学教師・Ta)
【集団による指導】
<12>いろんな先生が見たときに、一面しか見れてなかったところがこういう所もあるし、こういうところを伸ばしたらもっとやりやすくなるとかね、そういうようなたくさん目で見ることというのは非常に役立つかなと思います。(5年担任・理科担当・To) <13>算数だけでなく、家庭科だったり音楽だったり専科の先生が多いですけど、そういう先生に診てもらえることは、担任にとっても児童にとってもプラスになると思います。担任だったら気づかない専門的なことで、あの子はこういうところに鋭いねとか、そういうことを言ってもらって、そうやってそういうことに気づかされるってこともありますね。5年担任・Ta)

学校名	原田小学校
学年	6年
授業科目	算数
日時	2009年12月7日曜日 3限目
児童数	11人
先生数	TT 1人(担任) 1人(中学数学)
場所	6年教室
授業内容	桁数のプリント演習。 生徒がプリントを解き終わるまで、6年生担任の先生と中学の数学教師は並列に巡回しながら、生徒に指導していく。 小学校の先生が解説。途中、中学の先生の説明も入る。
	<p>11:50 中学校の先生は一人ひとりじっくりみたく上で、1人1人に間違っているポイントをいう。 先生と伸ばれたらすぐに対応する。 小学校の先生は全体を見ながら、進度が遅れている生徒を重点的にアドバイスする。</p>

図3. 5年算数 TTの授業展開

1) 運営特性

To, TAの2校の時程編成(図1)と交流²⁾の頻度(表8)をみると、Toの方が児童・生徒の休み時間のズレがなく、児童・生徒の行動領域が重なりやすいため、交流の頻度が高くなることがわかった。

2) 配置特性

2校の学年の配置を学年区分を視点にみると(図4)、Toは全学年が同じフロアに並んで配置されている学年区分一体型となり、一方Taは各学年区分ごとに生活領域が平面的、断面的に分節している学年区分分節型になる。学年配置タイプと交流の頻度(表8)をみると、学年区分一体型のToは、学年区分分節型のTaより交流の頻度が多く、また異学年交流の割合も高くなっている。一方Taでは異学年交流があまり発生していない。各学年区分の生活領域がつながっているか、分節しているかが影響し、異学年交流の頻度に差がでることがわかる。

この二つの特性による児童・生徒の行動領域の重なりが前提にあり、異学年交流に発展すると考えられる。以下はToを中心に異学年交流の特性を探る。

3) 空間特性

WSや廊下などの動線に、出会う機会があるだけでなく、「滞留空間がある」「空間の広さ」という特性があることでそれを活かした異学年交流に発生していることがわかった(図6)。

4) 内容特性

低学年同士、中学年同士、年の近い学年同士は、自

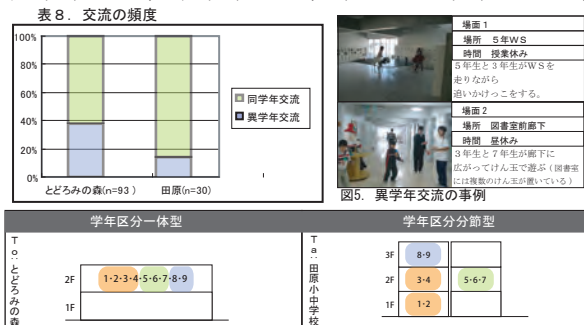


図4. 2校の学年配置のタイプ

らと近い能力をもって同等に接することが出来るため空間的要因があれば「追いかっこ」などの交流に発生しやすい(図5場面1)。一方、年の離れた学年同士は、空間的要因に「けん玉で遊ぶ」や「先生を介して遊ぶ」など、モノやヒトが契機となり交流に至ることがわかった(図5場面2)。

4.2 異学年交流の意義

小中一貫校において、児童・生徒が共に過ごし異学年交流が発生することで9学年にもわたる幅広い人間関係を形成できると共に、「教える」「世話する」「甘える」など兄弟関係に似た交流が起こり、交流の深化が見られ、単独では得られない経験をすることで精神面の育成などが期待できることがわかった。

5. 結論

小中一貫校において、小学校と中学校が連携を行ない、そして集団の目で児童・生徒を見守ることで、中学へ向けての学習環境の質の向上、児童・生徒の生活環境の充実に寄与し、児童・生徒の可能性を拡げていることがわかった。よりよい小中一貫校に向けて、些細なことでも児童や生徒の情報を教師間で共有し、児童・生徒の学力面、生徒指導面、行儀の面含めてトータル的に把握し、システム化して正しく継承発展していく必要がある。また中学校の負担の増大など量的な課題が見られる中で、小学校と中学校で相互補完しながら効率的に教育をするシステムを構築する必要がある。そのためには小学校、中学校が日常的に密な連携がとれる施設一体型は有効である。

また児童・生徒の異学年交流を発生させるためには、行動領域を重ねる運営の計画や近接性のある学年の配置が必要である。さらに、動線の機能だけで終わらない、広さのあるまた滞留できる廊下といった空間的要素と児童・生徒が興味を持つソフトを充実させる、また先生が媒介となる、などと「モノ」と「ヒト」という契機を合わせることで多様な交流がうむ上で重要である。

- 1) 複数の教員が役割を分担し協力しながら指導計画を立て、指導する方式。
- 2) 交流：休み時間内に発生している自発的な交流のすべてのことをいう



図6. Toにおける異学年交流の発生場所

討 議 等

討議 [赤崎弘平先生]

人事や学習方法と建築計画とはどういう関係があるのか。

回答：実際学校の現場で行なわれている運営や教育などのソフト面の実態をわかっていないと、建築計画だけでは解決できない問題があると考える。

討議 [嘉名光市先生]

企画された給食やクラブ活動などではない時間外の自発交流などは行なわれていたのか。

回答：5章にも述べているように、時程編成や学年の配置によって起こる自発交流の頻度は違っているものの、休み時間でどの学校でも自発交流は発生していた。

討議 [鈴木広隆先生]

小学校と中学校と先生の行き来をする上で免許はどうなっているのか。実際は中学校の教師が小学校の授業を上手く展開できているのか。

回答：補助的な立場で授業に携わる場合は免許をもっていなくても授業に携わることができる。

中学校の教師は小学校の授業の際、専門的な言葉を噛み砕いた表現に変えたり、視覚的に伝わりやすい図や表を用いるなど小学生の目線に合わせた授業を可能にしていた。

討議 [佐久間康富先生]

異学年交流の発生についての研究方法について。

回答：各階2,3名程度、計7人を校内全域に担当範囲を決めて配置し、休み時間内に各範囲に発生している児童、生徒の動き、特に交流場面を図面への記録、写真撮影などで採集した。

討議 [佐久間康富先生]

小中一貫校になることで生じる課題について。

回答：児童・生徒の身体寸法の違いによる建築・家具への留意である。